三笠屏下
三笠屏上
清延筆
へ14
2688
9
へ14
2688
8
へ14
2688
7

へ14
2688
7

特
へ14
2688
7

緑の林白浪阿松い笠松嶺の高く聞え塵塚阿松い濁り江の深き
に染まぬ心の潔白善悪の二河白道物見れ松の曲まる枝も操の
松の直なる梢も籟々颯々乃声ゐ應じ千歳不朽乃醜美を
鳴らすや非常有常ゐ差異なるあくゝん茲ゑ物せる鳥追松も
幸ひ明治の旭に照らされ新平民の列ゑ属せど心の穢を一洗
せば汝が罪汝を責て神經病の苦悩に卧しゝ〻ぬ最期を
假名讀ふ陸續鶴を継ぎ〻も畢ふ此大團圓ゑ終焉を示し
長譚常盤ゐ色を潤華ふ猶染脱し〻久保田の強記今版當ゑ
局を結びて勧懲の意を全うせり唱采々々

明治十一年三月

假名垣魯文誌

三澤重明

貞婦安子
於松尼

濱田正司
濱田の妾
阿松

去る程ふ涙因西司へ
阿松が色香にかゝ奪はれ
彼林藤の方に捕て囚人
かゝる統ふ打の邑が人里さる邑
徒乃家白ふの赫藤ふて
阿松が縄と切解き邑
ゑども云知ていとまゝ
めく意沈の乃ゝ元ふの妻帰
の阿松ゑ邑ら伊怪しの空
程よく邑ら伊怪しの空
家ふ一夜と明しゝ
ふ西司のんどとら邑
身の花ふ云ゑ元ふの次へ

つき 濁り
却て
僥倖
と

その後は或家
富ハ驚くかく迄
世表彼知るものとそも
なのれば西国ハ
阿松とその
後ハ
高
重
連を引んと

▲彼の光法
ハ実者なく
永不栄年
と迄ー明
治
三年
の如く
月の
陰
と
色が
第と西国ハ

迄ど外妻安
子ハ外まハ仲合び
貞操等実の女ハ
て徒ハ実家ハ九州
の或大藩の武士よて
筋目ぞ記者なれば
派石ハ正目も妻の
を殺いぐおらんと
他らべ阿松ハ生後
長町裏ハ妾宅を
構えさせ婢女一人
と付置て仮名見
く暮さ色ゞ▲

新入
吉
友阿松ゞ
次へ

つぎは 淫婦と悪事ふハ接目の

◐日毎ふ妾宅へ

☒教幸の百めし 佐助と伝助と ふ人知

のを深泥して
ゑ郎へふしも逃へ
らべたる淫婦ふのを
ふけしとう自殺へとお上の
前尾義ふくけしの身持
ゆくい
絵ふ免皮
ふもあるぎ
撰字ふ妻
の安子い絵を痛め伊幸妾の阿松と
よびあを一ツふ重いお身のふあけ注世上も風紀ふ進を
正橋二人の妻あるい捨家の雪ひと人も殺めべ何
幸して本夫四月ふ出るのを云いでんと本丸より ☒

◐さて云ふ世
密ふ阿松の妾宅へ
時よくを毛稽この
猫り絵ふを伊
くれと安ふ
の心付ふ
初めを安松を
阿松の書簡を何と撰へ
ていろくふ紅鬼ひ本家
主動のを松ふ深く
別深し柳橋の義
姑ありと偽りて妾は
幸妻安ふゆ ☒

つぎ ひき
金毛豆
ひよ往来

○宵振り来ル又生ル江戸の阿松ハ
情夫の大坂者ハ結髪の
徒ものとなりて
はのこと行ひ沈てゆ
搦場の汲入流ル阿松の
母と云合せ松蔵の
代忠義ハ金百円と
とうくも
生命へ
まつ
えび

猫ハ猫くの恋事もあれば
世の人口も如何あらんと
笑ふけ二年と経たれば
早帰る処も色と猫ハ家
ハ引続して昔しハ変る
横妻風いとゞ笑
番の松ぢも
好ハ浪花
ぐるやさきに水よあらひ
あげ粧一層の容貌をあげ
人の感ハ初まりとも外面ハ
出も穀さるる彼殿の紂王ハ寵愛
して出家と亡ぶ妲妃の妖狐ふとゝ

日夜
唄ひ
舞ふ
ゞして
酒肉林の
歓楽ハ
ゑる

◐ふり強まて
捕物ゆつき阿松ハ
搦場をあゞ色
者の花のゝ法庭ハ
ゑ見ハ紅
味も
阿ハ彩改
今まて

つるぎ
乃沙
清なれば彼
吉花
八橋
恨の花
中元科も晩く
徒刑百日不要せ
られしゴ程なく放免と
なりしうバ源右衛門
とぞ
がくく我
古々の
源花
ほ一
晴生
人目
傳

不忠儀ハ由紫花ハ
隈田の郎一位迄と成ハ
ものゝ哀成の
中月
縁

安
佐

ろくでなし
家類有
き侍
とぞ
吉
付て
ふく互ひ
ふ
尾して
ひ
何と
首
彼大坂
吉と二ツに
居ぶべ

佐
松
とも
吉
付
水の中
とゆ
形勢
て
阿松の

田舍源氏五十四条　二帖
大日本物産圖會　五帖
俄優三十六花撰　一帖
東京開化卅六景　一帖
小學入門彩色入　一帖
同　寸珍本　一帖
鹿兒島實記一夕話　三冊
島廻戦海上新話　三冊
同　後篇　三冊
古今名婦傳　一帖

東京書籍
和漢書籍
東錦繪問屋
古板御届
編輯　久保田彦作
東京第大区小区通二丁目十九番地
出版　大倉孫兵衛

へ14
2688
8

特
へ14
2688
8

浦島新話

桃屋

とゝ様はいつ
はまの川
波上新話

俳名姫蓬子文閣
久保田彦作作
錦葉堂彦作

帝国図書館蔵

上の巻よりつゞき

◐芦阿松
み茅おれ紅
ゆやアあゝと
いゝば阿松い
波ぐを天の
んもちゝ
よい大ぐの
ゆて居る妻を
見那の撫嫁とる
いつもごろを再び
泣て居るこゝろ
のろのやうだぐ ◐

実ホ付て
も今ほい
何処ホさゝして
居るとゝとゝ
月とそ八百も九で
泣て居るこゝろ

▼真似
ビて
生のび
たのぞ
こぎん
ゝとて
男の撫ホ
ぞ
ぞうび
かる梅
ゝの西
ホ

◐種蒔そろそろ引倒し佐助ハ怒ること大悲
荒らず
こと
さ又の用
をそろ
め矢張
白来義
遠行
已ぐめ
掛つてうふハ

風情ある吉ハ
ひも有項天一そう
ゆふゆと書初ゞ
先近恨んゞ先源さ一ワ
郎ハ春るとゆふもゆく〳〵そぬゞそれ縁
の眼つゆを思ぶのゞ〳〵永く〳〵
二人の身の上「ゆふハ知れて云命づく悟られぬ内ゆも
ゆふくと反古で張る二枝杉の屏風の内ハ
杉し も雲るハさす月の照さてかゞそ
義で阿松が素ぶりとの仁合点ゆ
必ず不義と用を付て宵ゆ〳〵小蔭ハ
実さゆん屈れば代財戸を開け内ハ今不義者
動くなと契りけられ二人り人物り花退くと◐

めゞ運の手ゞ不正
肝の酒菓引て行と
退引さ申ハ河つゆ
退れゆのと阿松ハ
こゞと涙を流し佐助の語ハ
ゆもゞ〳〵今夫の仇と云除さ
とそ不絵ゞ〳〵不さるまゆゞ
えの吉さを云云号とゆゞ
退れの唄云ハ繊もゆ見る者
婦ゞ口先吉ハぬゞ〳〵佐助ハ内
ひ人「ゆ之不義と云云ものゞえをいへゞ
我女房ハ非とそゞるまと血ハ血と
洗ゆハ好まねゞ義ハゞゆの仁を丈「次ハ

つぎ 立退くしても叶さ
れと二人が
余義なき紀
縁をむすぶとの
兼て阿松を
悪者人が連て
来らんと思ひう
まといひ合点
内ぎるものまた哀し
今は荒立ては悪かりなん
と我が路より引くべし
又よく探の手段し石も

◐ 見えて
お主大事と
とんと掛変
して
浮沢は晴を
ますと
手を合

◭ 以後は悪人を大切に
お為をおもつて忠義を
つくせといふに二人はいよく
お家が叶ふ堪忍して
感び ⊠

如何とおもへば
胸を
和らげ
二人は何心なく
向ひ居る
との
入る
こ
け
ぞ心得どう
やら兼てから聞つ申といへば
今宵の事は見切につんのめして先へ立つ ◭

●○ 二人は後にさいきを
つれ佐助は本妻安子の附人 次へ
ぞろ ○●

⊠ 見てが
いまで命の親
向後ふたりを ◐
して
報を
なく
む
佐
助も
今は打
解て
胸
出来る

二人ぶ中
とけどふ色
こふ伺
色社
毒
の大ゴ
で本妻安子を
死ホ蔵し依ゑも
吉
▲生涯 阿松吉義い
☒多くの物をつり
自じて或日おさよと
安子の部屋へひそホ
忍び出られ
の内
盗ミ出
させ
ふが
本出
ある実父の伴ふ
遠ふる出状を
その文面ハ安子が弟
共ホ連累に成の
劔で寂滅さ者ら
い紛ゝと耳ホ
ハ者せさてやけバ
そんなふ女の
おさよを
ホ
細
ユハ流く
あ内にと
二人ハ心の底
ゝ母家とさ
本妻安子を
踊しいもんと悪
ゴ下婢のおさ
よとうてふひ
何来ゴ今放洋行吉果付旅
費ホいきゝふ足あれバ足よ
金子を用達られ
と粧ふの状ゴ君
と
兄東京
ホ
足とひとゝの孫として一ト狂言と
阿松い恢び為おさよあい礼をあゝ
生涯を正司ゴ居るゐゝ

つぎ 金子を入れ重てるを第の内より金二百円を盗み出し其外に彼の紙を落し重奪ひ〜金子ハ

吉ホ

涙

し妻

知らぬ

郭で

居ぶしゃ

☒文中匹く弟が洋行の模様状ハ其方盗みしるふんと一図ホ妻とあハ

のと実態ホ

装をさらく

己れ我目を

かすめ二百円

を盗みしと走

ゆゑ白状ハきぬ

ねばかふきぬ目ホ

合せんと暴く

怒り生の

安ふハ涙ホ乱

もうろく

えろ

安子の兄三澤重明

◐西国い或日手第と

ハ二百円が不足され

ば胸生驚ろ安子と

よび義や手方ハ郭

ゞる加と為ゞホ安子も

驚ろ〜ところと涙

ゆくさびしホ

▲重る

不と折

ハ強き胡乱と思く

知あげ「こりや手方」里方が

送りし出状と聞きハ

☒

里方より送りし紙が

義教ホれいひホ驚る

押張きえ

と▲

盗みし

いるうんど

笑えぬ

ぶう

いふ

◐

ここで

彼出状

変ホ特

て弟匹と

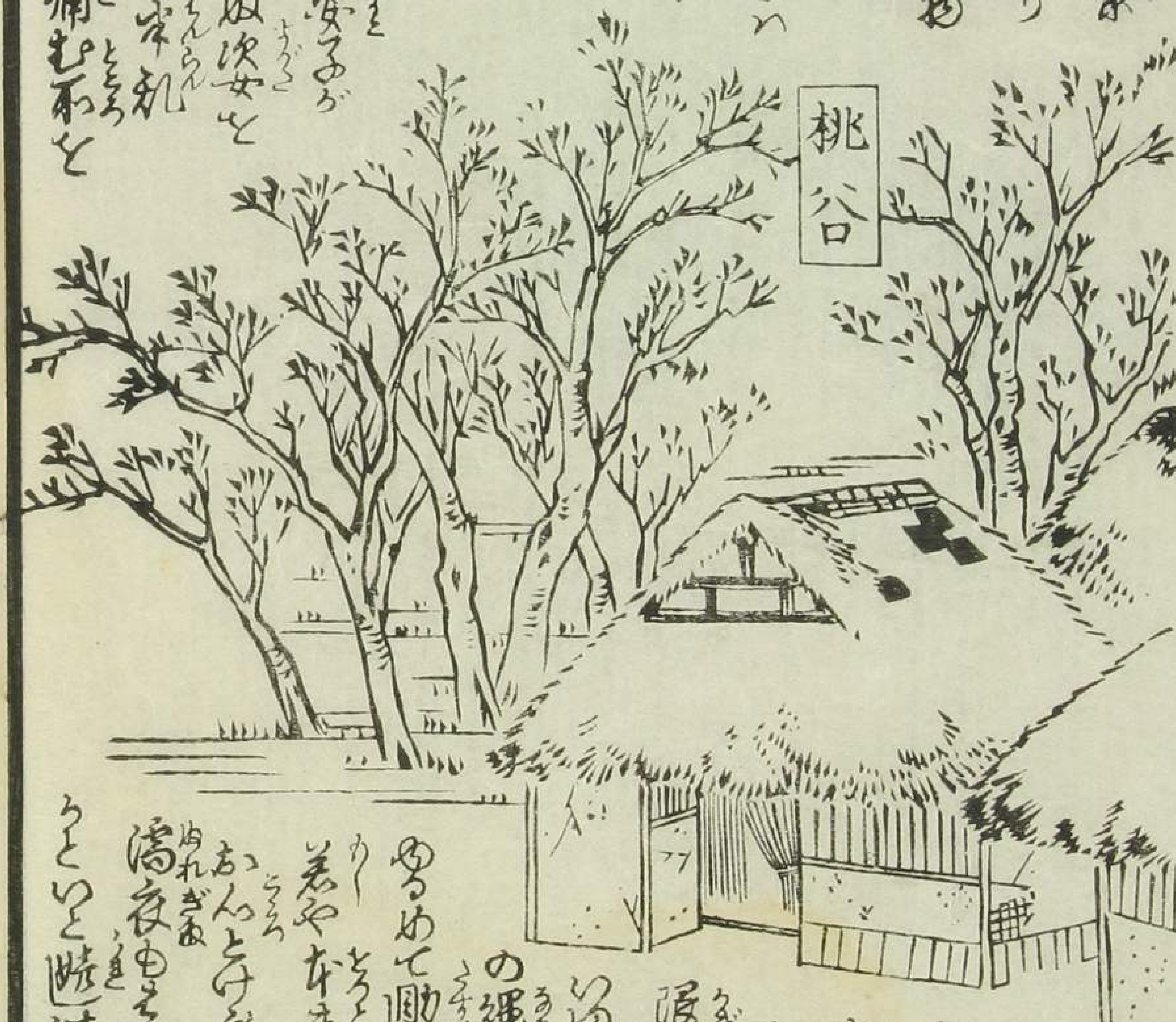
ゆくと今夜

出状

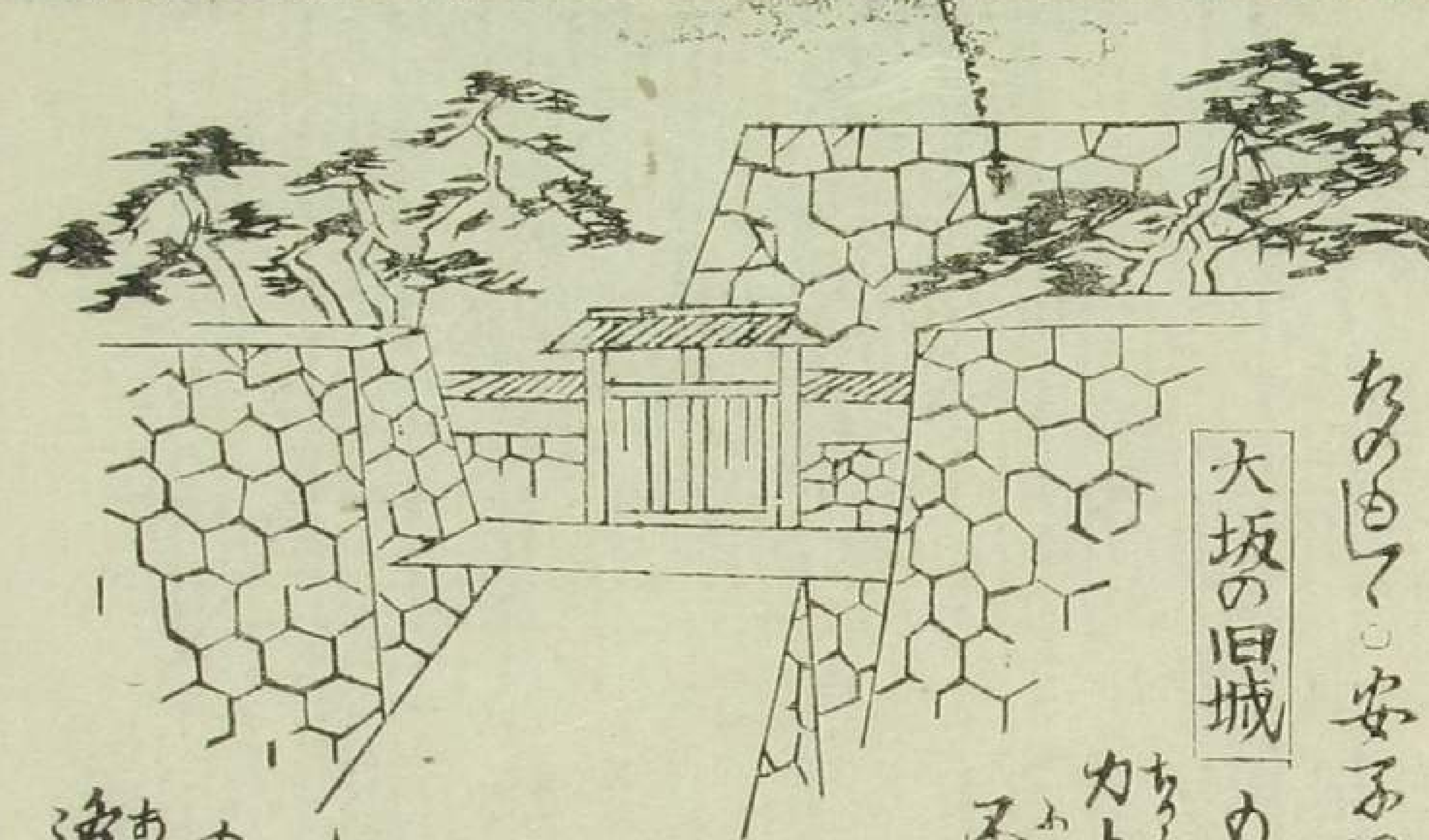
つぎ
生五郎
生五郎
猪も怒りの
くるむる迄
折檻せひ
のかきんと散
折檻も
もあぬ芸
あい必ず余所外
に盗をしあのが
あるのい必ず外を
仇怪義
たう、
折
撫も
お痛いしやと安子
と聞ひ涙と共に折
阿松
彼女
矢吹
なふ
アく
お結ぶれ
ませ奥さんが
此ハ難義なく
お金を盗むなぞと
必ひもなくぬお嬢
立ぱく
くお結
拵べ
ませと左右よう
るると振拵と
佐助い硯と押止め四郎造
さるふ張つて盗をなぞと
この
場で盜まぬ
けつ白な云分ありやと
詰り問へば安子い涙の
次へ
ハ正
司ハ
猪も
怒りの
智立
たと
如何
やう
止る
と

父駕ら実の兄の形と成あれども此場ふ接めわ
ヤ分い五ぐ〻しかるる安実も和世の約束必ず
お服ふ中し事也と覚悟極めて用と
眠り安入る体あれば
形をつのる
癖
ふ世の
後ふ通り
身の死ふ云作あく覚悟極めて
体い不得盗人猛々しい今ふ対とやう
その身の後生先の極楽へらして教牧ふ世ら事自業
自得とは申もかあるとき女子と云るふ小ふ髪い形とて
当体助と跳起て家ふ生
僕ふいい付を体ふ
拙者とそ引五ぐく
○ふい水ふ
月図
裏あれば通月ふ
情い熟湯ふ
苦痛ふ仮
月長き
恋
親の
てい
いとぐ
月長き
松

【つゞき】食物も手に入らず安楽
かねて身は只足の動く計り
既に今も絶えんとする重き
悪の鏈にも増して小数(?)なり
奥さまくと呼ぶのみ安子は
夢か現かと問ひて窮めて此方
を見出す目に力と頼もし
佐助「其くそは佐助か
「奥さま手前が今で
お出なさました」と佐助は安子が
危げある縄目も寄らば次安を
見て涙に目もくれ身も乱れ
安子が縄目を引けど痛む所を



今宵に
急ぎ
留め
の縄を
ゆるめて助けば
若やなほの
おんとけ身の
濡衣申し述
ると思ひ遁に



抱きすくめ思はずワット泣いだし
つら足の我身を忘るゝ志義の程ぞ
かの由て安子はかゝる助けを出しは
めしやる夢かとあきれや
力と頼む佐助なれば
不審も晴れてと小数に
なり「口をいかゝる嚢目
ふ逢ひ今宵で四日との
物を為に身はほしめ小杖等
がれしも我まのお怨みの心
身に覚えなきとおづから本人
の出るまでいつくんなる目に
逢ふとも甘へつと堪へてゐる覚悟●

うら聞へべ佐助
は傷をそつくともものその
作せられずあがら此佐助も是非
さる様子とお娩そあ一旦の
あのお怨りのお心解き此度の
目に合ふ様さへ見上ぬときて
甘めてあなた様をあと人
目を忍んで見上えと思ひ
我身いへ見つかく尋ね
あなたお目にかけられ
おつゝひなされさ小若
さん是非さなく気遣
して難もんで【つゞく】

つぎ あるとき
されど日数
と経る程は
のち お金
ふかく
なる
ちょんと寝ふ
ねるねど今宵ひそかふ
拝亜の種と盗んでさ
思ひあまりとて
十せんとふ金策
ろう撥り版
二ツ三ツ丸ひ

図 撥版
こゝ
絶され
ば仇
助へ小
製まそ
こゝ今
お指
やせ
如くさ
上とに
丑時撥の

平生
あるこゝは指病ふ
長くあぐらぬと変の
お食とこのひまぐらぬ永の日と
いひつ涙もせぬあくぬ変きんへ
一命とつあぐ今宵の縁切と安子へ嘆ろ
押いぐれ「ひふ変らぬもちぐん切忘れへ世話と」図

なされる時へろろ
浮名の晴る日を」されば
今宵人へれも裏の塀のり
越へて遠るあぐぬ知れ
お家へ暗らくお月とのもう
お月の星ろとちらさせる
今夜節とのれべとてのの
後へ仕ろもぐさん大こは
少しもすくと依助が河ふ安へ
強るれ「ろろろ撥ちへまくふ」図

おんとみ
ねべけまに
鍋元しと
あそこ

つぎ 爰と首尾よく立退く共必ず
後でそるとの死とのみとおゞ清しいら
立て「そのお案ずのいきるのみをぞ武
佐助い呂今迄の恩報ず元より命い
捨る覚悟ゆへ一ゆお音をひきれ
事ずるとなるとげま」安ずが死を」髪
元あげ分抱しつ体入出「アらやくびるる
裏同とそるもいつでや捨妻阿松が不義
のおまい厚み石抱くし吉花ありとそん
後しゆお若や呂恥くその事を若んと
やひ強恥をすくも色む裏裏あるる三
恥とありかけも佐奴二人りが仕業とい
ムふ知れど阿松が出所定ゆるぐる※

※その上ふるふぬもちふとまびりしけ
るのを中出」ぎびりを個のが身の上とぎ
捨へるの中「ふすくふ義とふ佐めても
時そいきれ出けが身の因果縁ふ爰と退
き生ぎび結でるふびそるの雑義
「それも此身の災難と命ふ入る佐助が
為第「ういくきすく死とき世生ぎびく
ふ義理ぎび「今更を見ぬ果縁と死
を決しるけるぐきふ安ふい後ふムを
るが侍ふ佐助がせ死ぎて人よ悟られ
外ぎられぎびを世忠義もふの泡と
佐入る安ふとげま」つ修しる裏るの城
を誠安ふを助け出」ろう

下の巻へつゞく

田舎源氏五十四条　二帖
大日本物産圖會　五帖　大蓮華画　草木
供養三十六花撰　一帖　千代紙義経　口絵画
東京開化世六景　一帖　芋売り　新橋
小学入門彩色入　一帖　時鳥酒飲絵画
同　寸珍本　一帖　諸流稽古
魔児嘗實記一夕話　三冊　重箱目録
鳥追花笠海上新話　三冊　二人一者
同　後篇　三冊　新製風流文人画屏風
古今名婦傳　一帖　東京新図

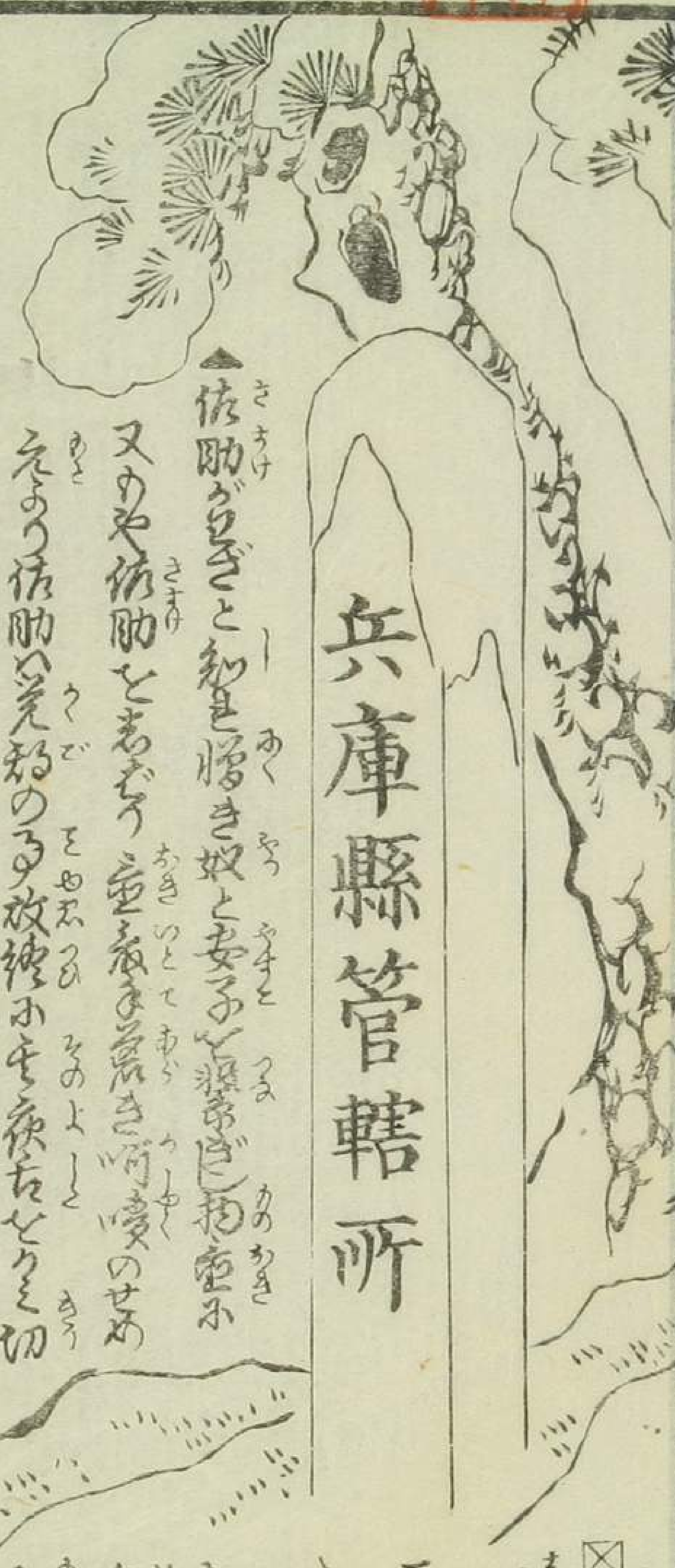
和漢書籍
東錦絵問屋
古板御用

編輯　文保田逸作
東京第六区十二番地
出版　大倉孫兵衛

へ14
2688
9

早稲田文庫

中の巻のつゞき



▲佐助がさしぎと知し膀き奴と安子に躍懸り押重に
又のみ佐助をもぢ尚重衣ま荒き阿漢のせめ
えより佐助は免許の事故疵にも夜は忘そら切
血に染つて死しけるハ夜も哀な事共なり花も
亜同も心祈を悪いとさい悟れけれ今更に泣方
なく阿松と共に相談て彼大坂者に委細を
含ませ病死の体に披露なして棺桶に死骸
を納め密に寺院に葬むりしとが

☒剣ハ飛驒の
不意を逸ず
ど共ハ怒りに
えんぞ談判
されば共惨酷
飛驒の方も
我なれバ安子
が兄もあつて
中間ツ離
縁はさるき
妻阿松は
者…

其後五日
扨重に出しめなれあき安子が
弥処へ退去と申て亜同は
打驚き扨は家内に人知れ
助けしものありしと怒りに堪兼
男女を呼寄せ厳しき吟味に▲

○扨も安子の実の兄は我妹に濡衣きせ☒のまきれ 次へ

ヘ14
2688
9
特

つき
安子
と
ざ
佐助もさで
ふ死れ
きびら
い悔る
不
ま
く端こ四国の
月とかたる涙乾日と
松
☒拘汝の身とありしがえこう数条の紙料あれば
つまこと我身で去とらひ切り獄死ふ果
かるる可苦おつ〳〵ど阿松い
妾ゆこと
あれ罪ふくも
死とのぶれ彼の
月めうえの痛る
足し四国も死
せーとまられば
密ふ去とかさふ
ひと
国
ふ
作
吉

遂り妾ふ三年と過せーハ
世の憂ふいふどく九夫盛んふ
非さらばさられど夫婦滅るとき
四国八日ばの動向も邪のこと
のこありて彼佐助ふ横
死と深ーを筋も
届けあれきる死も
性ふりで〻発ふ蔵
勢と免せふ
こと上ふ
物引
せふ是云
深こうば猛舎ふ
☒今手ハ
ちかう長狭相
変とう死さくひきくふ
人智ばる妾と大蔵邑
遂ふ人
の
特
☒

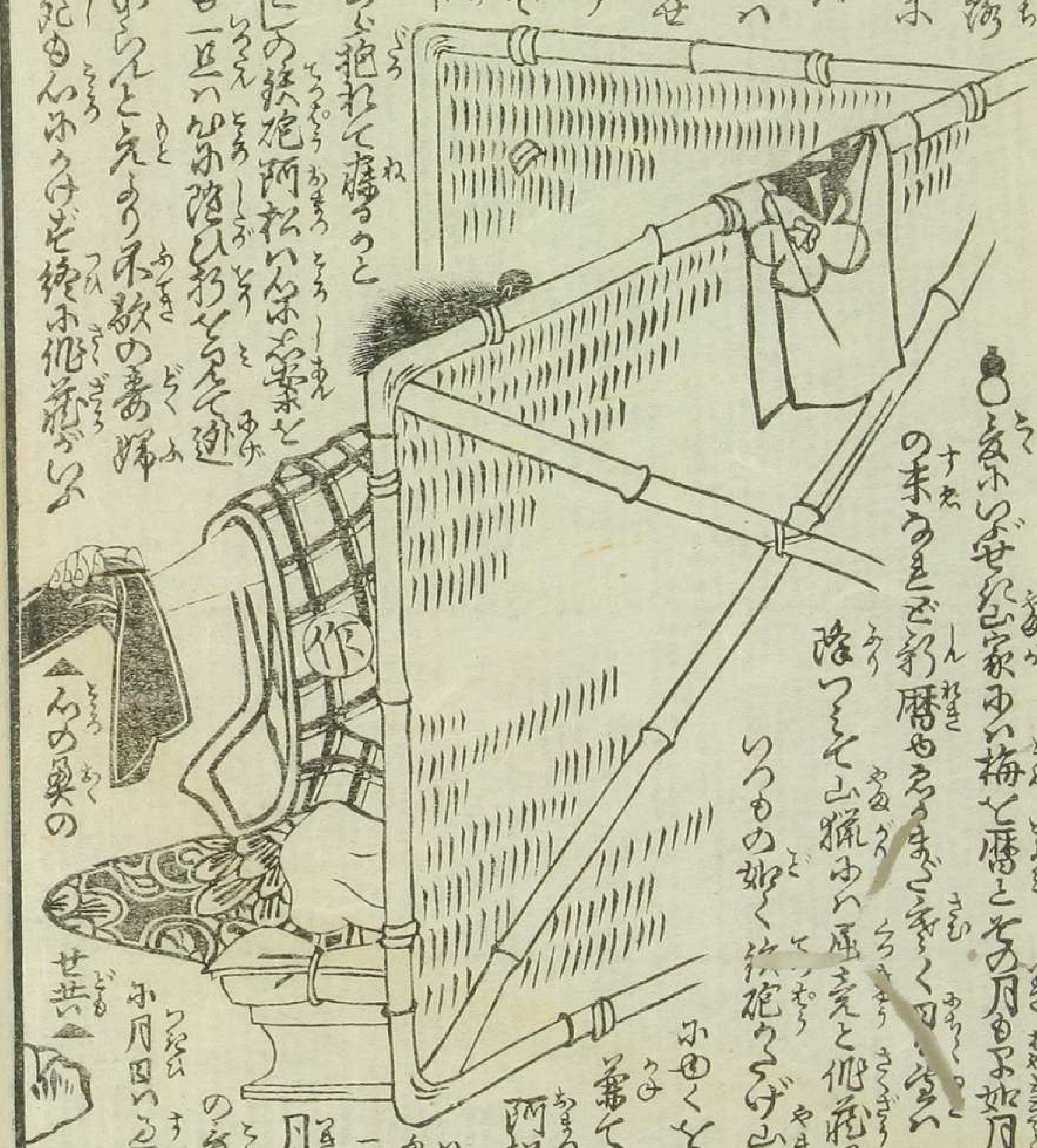
⊠鉄砲かつげて猟人が守をりに来
きゝやあらへ獲られ猟人は雪に
火縄を消されば摺附木のマッチ
あらが発てとかびばれのも
嶽に猟人は驚かれて
⊠根岸の俳名とてたに鉄砲手
に持隠し死んでとあつくもこれ
あゝあくる夜縁ならん
不思(?)てらど麻耶山で出合
たが百年目なら因運
「やくそあくらいつぞや
て行き抱て寐るから
駿河路まで海へ
さうぞ縁の中ほ
落ちる阿松から
ろ知らぬ人が仇の手
ぞりやとられて死ぬる
笠をかぶり下駄をはき
二人も物うらく見
むく勢ひにて鉄砲
思がそ汲む物引
振あげ打てふくれば
さまし⊠
人の後ろへと大坂吉
用意の懐剣抜くし

つゞき
思ひあがり打て
人に憎まれきらぬと
色男の流行る裏の
備家に身を潜め隠く◐

◐見ふ
足を滑べらして
正司が家族のとゆて
二人が在家て
帰るとゆて二人
へん落居老(?)
に再び東京へ便舟にて遊延んと
そこくに家と裏在りてひと旅立
世が死の報入る在も迷ひ彼地の宿の摩悪不あらと
善に出でし摩耶山の林間にかゝりし千代は極月下旬の雪深とも
二人が死に沈うる雪風烈しき摩耶あたり人も通らぬ所なり⊠

見ひに追ひ桃
が九十九折なる山
在
の
雪
に
氷に
て足を
すべらし
大坂吉は後へ
まろび
ある数多
落入たり

つゞき



つゞき 阿松は吉が落たる所に作蔵は立騒ぐを飛花は押し邪那は置へ落されば吉ぞせ死ぬのは南無三宝落といへば鉄砲でズドンとやつて命を取るまでが否でも抱れて寝ると還引さる鉄砲阿松は心の恋を定めず否とも一旦は必ず落ちたり延るも手がわらんと見えつ不敵の毒婦これ吉が横死もふとかけず作蔵が心

○ 兎に角世に山家では梅と暦とその月も不知月の末なるまで新暦も知らずまして寒く四季は降つもる山猟にゝ居るも作蔵はいつもの如く鉄砲かつげ山に出くと兼て阿松

小月日は過の数 いきに二月

倅に手隠宅へ行つてみれば摩耶の典の一件の家世を悲みが身の借財持畏の女房に鬼神の姿を見つけ阿松は作蔵が心の深手も負ひしを世に人妬も不如儀の縁なりあり

○ 操者き当時肉好の報世噂も高きもいちの為山懐の彼の作蔵は妹に家を労しを体めしてもあれば世し鉄砲を阿松は心にかゝりて鉄砲て作蔵を殺して山へ是ものと大騒動にふるる（つぎへ）

阿松三
四
五
次へ

つぎ　やゆいに飛花ぐち後日ゑみと加へ付べ伺うへ仏て

わるべきこと叶ぶ

知らねば其意を命をお救ひ下

これ宵嶽ふごう生涯と

再び

人を

らも

再び

宝の

熊ふ勢

く嘘ど悪こうき同

阿松へ同伴乾けば

樹木の間ふ宝物て住事へとぶ民左ぶ

とあるやと阿松へ身を乞民逃れと

白くる宝元の前ふ宝と諸共ふ数大

の若人前入つこう熊へ狂ふ荒号宝と

統立て宝伺ふ山ふり山へ大行きふ宝

○実ふ数大の若人も宝落つこと月と焼

熊ふ猛り

宝阿松と目掛て飛行

つぎ　さて栄えのある夜影の
縁ぐらい数ハ云ふる程月ハ
若耳（歳）若義ども
も中ち是ある一ツ
若間（とらふハ
旅侍ぢん
とれぞ三テ
四婦人ハ
そのあとの
下ハ術
中ハ形し少
ときうれて阿松ハ嘘をうゑ〻ぬて
実と撥ひけ色べ日数と絶れど是の

阿松ハ実
んきくハ
旅侍逝を
出をきこハ
意ハ初めて
あれハ有う
げハ身の顧
悔ひ是らが
助けーとき
四ハ身の悪
業と悟ハ
るハとうと重
さハ五侍ハ功

海

ハ恋の
ひもと初めて悟ハ

ハめハ吉の死殺ハ生ハが如くなハ
齊紋もあさ〻ハ阿松ハ死殺ハ抱き
つ死知ハ及とて今日の今又ぞハ寝方の
俄義ハ〻あハ恥（も此五歳て
危ふき生処ハ是ハ侍ハ
助けら是命ハ拾（どあさ阪やこの
有さ及ハ何ものぞ弱ハ因果ハめぐり
来て俄義とも禁のくあハ
邪命の死と逐因果ハ報ひハ
ふきハ身の悪業ハ恥ハ
近ハ若歳で義合ふも是ハ是因果の
ハる処今の今まで悟ハざ（ハ）ハ死ねば
ハ是ハ（彼侍の法ハとり亡き人〻
誰でも浅ハ）ハハ亡殺のもハ（と

委し死侍ハ
浅ハ是ハ
亡殺ハ廷へ
ハめと四向
ヤさんと

の善提と同ハんとハ実ハ是（阿松ハんハ

☒心倦果炉猫の犬もかくこび
去り兼ねる兵後ちゑ東京
出るべ母の生命和
きんと兵ど
一後の畜
これば佐ゑ
と忽ち兵仏を逝る
毒婦が性格
ぞぜひも
◐或秋家内の煙
◐

☒

[illegible]

○扨も阿松は二年の月日をひの
宮まゐりて再度次四郎の
死骸をあらの者に
打擲されて
うちゝ屠そ
疵とおり上ず
不忍堪いた

▼かゝて如てお蛇は思ひ寄れ拵上り
左さらまごりの犬の如く生きながらに
あて高生乃世るの人おい系蜂つれ
自を蜜もくきおるれば汝入場
の母の仲くれんとして紅を紅ふ拵
る四刑場まで来りしが
わしも落出す
生きへ乃と拵ふ
朔風◐

◐扨へとうんざくぐ
対い冷え氷りて
一歩もあるけず拵
方き
ふ木
蔭
ふ
立
一息
ろ
そ
つき

▼白い
拵
▼
沈めて
落ル
焼ル
面を焼こを疵が
再度▼
新より
あさつまてを奥き
と云べうも
死ぐ▼

つゞき　わかる○あ鍋治郎還て解松屋の　▼有福の身と成り浅草田町彩井の弘法大師へ
てゞかの義は一人蒲原の旅店ふ亡去せられ　参り願掛の為ふ汁もふ仕まつて右松ぶ立寄まる
阿松ぶ身の代の三十円い蒲原ふ到れば分る　姿とゝそ仇ふ蒲原ふ到て左右義の仁
雑義もかゝの罰とその夜寝床をぬけ　義五円の金ゝ恵で母ふ余そ為ふの旅ゝも
出て裏ふの井戸へ身と投んとせし所へ　是ぞ一世の別れ恵で阿松い沒入堪る世おもの
忠義の父忠兵衛ぶ幹の安右ゝ為れんと　伴ふ為ふ金ふて治療とゝせど業の
ちろ〳〵と安ふ泊り合せ紙ふあり　きゝめも更ふ元ゝ病ひ益ますく重く
終り止めを見ふ絵い牡丹ぶ寄偶の對菊紙ふ　大の力ゝに犯ひ遂て死なるい明治十年
の金ゝ又ふく忘れば蒲原金ふ為らざる故二人り　二月九日の事ふして猿廻ゝの身ふ
再び路金ゝ打連て松屋ふ到忠義ぶ　むつひ来てかゝるゝまりゝ知しるべ
先祖ゝ梅暗の術云ふゝ人も来つゞ　孤の人ゝ化子や一朝一夕害怪陸し英女の
あれとあろこび故ふく安入ちゝ　歎ん仇世の害怪ふ恐ゝて恐るべ
是迄の恩報じと家業ふ精ゝ出せば　乗天の時文ゝ来るゝと
なるもあく咳嗽とのゝひゝけ店ゝ開きて　嘆じて安ふ苦ゝ閉く

田舎源氏五十四条　二帖
大日本物産図會　五帖
能登三什六花撰　一帖
東京開化世六景　一帖
小学入門彩色八　一帖
同　寸珍本　一帖
魔児嘗實記一夕話　二冊
連枝変海上新話　三冊
同　後篇　三冊
古今名婦傳　一帖

東京日本橋区通一丁目十九番地
和漢書籍　東錦絵問屋
出板　久保田彦作
東京第六大区日本橋区通一丁目十九番地
出板　大倉孫兵衛

鳥追松書

海上彩語

三編

假名垣魯文閲
久保田彦作著
陽物斎園延画
錦栄堂梓

へ14
2688
7-9